# 研究プロジェクト一覧（平成23年度）

## 教員提案型連携プロジェクト

| 大区分 | 研究課題 | プロジェクト代表者 |
|---|---|---|
| 負の感情 | 自己感情の制御と他者感情の認知の神経機構 | 船橋新太郎 |
| | 負の感情研究 ── 怨霊から嫉妬まで | 鎌田東二 |
| | 甲状腺疾患における「感情のなさ」について | 河合俊雄 |
| | ストレス予防研究と教育 | カール・ベッカー |
| こころ観 | こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究<br>（人類はこころをどのようにとらえてきたか？） | 鎌田東二 |
| | こころとモノをつなぐワザの研究 | 鎌田東二 |
| | メタ認知に関する行動学的および神経科学的研究 | 船橋新太郎 |
| | 現代における自己意識・他者意識の研究 | 河合俊雄 |
| きずな形成 | 感情・認知機能におよぼす他者・モノの影響 | 吉川左紀子 |
| | 共感的対話の相互作用性 | 吉川左紀子 |
| | 信頼・愛着の形成とその成熟過程の比較認知研究 | 森崎礼子 |
| | 社会的ネットワークの機能と性質：「つなぐ」役割の検証 | 内田由紀子 |
| 現代の生き方 | 新人看護師のストレス予防とＳＯＣ改善調査 | カール・ベッカー |
| | 文化と幸福感：社会的適応からのアプローチ | 内田由紀子 |
| 自然とからだ | 癒し空間の比較研究 | 鎌田東二 |
| | 進化と文化とこころ：生物的視点と社会的視点からこころを探る | 平石　界 |
| 発達障害 | 発達障害への心理療法的アプローチ | 河合俊雄 |
| | 発達障害と読み書き支援 | 吉川左紀子 |
| 教育 | こころ学創生：教育プロジェクト | 吉川左紀子 |
| | こころの研究ニュースの発信：こころ学ブログ | 平石　界 |
| | 脳機能イメージングと心理学実験設備の整備と運用体制の構築 | 吉川左紀子 |
| | 東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～ | 鎌田東二 |

## 一般公募型連携プロジェクト

| 研究課題 | プロジェクト代表者 |
|---|---|
| 家族機能と社会性の進化行動遺伝学 ── 双生児法による | 安藤寿康（慶應義塾大学文学部） |
| 日本人２型糖尿病患者における療養指導効果の検討 | 藤本新平（高知大学医学部） |
| 察するコミュニケーションと表すコミュニケーション | 宮本百合（ウィスコンシン大学マディソン校） |
| 物への依存・人への依存　移行対象研究からの検討 | 黒川嘉子（佛教大学教育学部） |
| 顔処理の潜在的側面：学習過程と個人差からの検討 | 小川洋和（関西学院大学文学部） |
| モノと感情移入・感覚移入に関する基盤研究 | 大西宏志（京都造形芸術大学芸術学部） |
| ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究－文化と医療誌における映像資料・精神生態関与資料をおもな対象として－ | 宮坂敬造（慶應義塾大学文学部） |
| 近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究 | 秋丸知貴（日本美術新聞社編集局長） |
| こころとからだをつなぐメディアとしての味覚研究：食の「質」をふまえた食教育の検討 | 荒牧麻子（女子栄養大学栄養学部） |
| 利他主義の進化認知科学的基盤 | 小田　亮（名古屋工業大学大学院工学研究科） |

研究プロジェクト

# 負の感情研究――怨霊から嫉妬まで

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

## ■研究の背景

人間の「こころ」のはたらきの中で特に大きな影響を及ぼすのが「負」の感情である。「負」の感情には、怒り、憎しみ、恨み、嫉みなどさまざまあるが、それをコントロールすることは容易ではなく、「攻撃」に代表される社会的行動の最も強力な「動機」となり得るとされてきた。本研究では、これまで「負」とされてきた感情を、「正」の感情との相補的な関係や可換性を手がかりに、同時代の諸社会における参与観察とさまざまな時代の文献解釈を往還しつつ分析してゆく。

## ■2011年度の研究活動

2011年度はワザ学と共同して２回の研究会を行った。2011年５月16日、第４回研究会（ワザ学研究プロジェクトと共同開催）。同年11月24日、第５回研究会（ワザ学・こころ観研究プロジェクトと共同開催）。

## ■二つの自然災害によせて

東日本大震災の被災地調査は、鎌田東二『現代神道論――霊性と生態智の研究』春秋社、2011年11月刊にまとめた。

天河大辨財天社：2011年９月４日、奈良県山間部を集中豪雨が襲った。天ノ川―十津川―熊野川水系に160カ所以上の土砂崩れが起きた。土砂ダム・せき止め湖が作られ、逆流や滞留が起こり、増水により大被害が発生した。天川村の隣の大塔村は土砂崩れで幹線道路が分断され、陸の孤島になった。天河大辨財天社は社務所と参集殿が床上浸水。坪ノ内地区では３カ所で土砂崩れが起き、大洪水をもたらした。北から南に流れる天ノ川本流の濁流と、東から西に流れる支流の坪ノ内川を伴う奔流と、南での大規模な土砂崩れによってできた一時的な天然ダムがもたらす逆流の３つが、禊殿の前あたりの合流地点でぶつかり、30m以上の水柱となって山の尾根を越えるほどに高くなり、それが何波にもわたって坪ノ内の集落に押し寄せた。柿坂神酒之祐宮司は、「こんなに大きな被害は有史以来初めてだ」と何度も繰り返した。

## ■能「鵺（ぬえ）」にみる負の感情

「諸国一見の僧」（ワキ）が芦屋の浜辺に至り、夜ごとに幽霊の出る堂に泊まるはめとなった。その堂にいると、鵺の「霊」（シテ）がうつほ舟に乗って現れる。僧は怪しく思って正体を尋ねると、鵺の霊は、「葦の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり」（『伊勢物語』87段）の歌を謡いながら、僧の「法の力」で自分の「心の闇」を弔ってほしいと依頼し、ついに自分は近衛天皇の世に源頼政に退治された鵺であると明かす。鵺は退治されたときの無念の様子を物語り、僧に弔いを頼み、「月日も見えず暗きより、暗き道にぞ入りにける。はるかに照らせ山の端の、はるかに照らせ、山の端の月と共に……」と謡いつつ、夜の海の波間に消えてゆく。「心の闇」を持ち「暗き道」に入った鵺に、山の端の月は静かな光を照らし出す。

世阿弥が「鵺」を書いたのは応永23年（1416）頃である。「鵺」の最後の謡、「月日も見えず暗きより……」は、和泉式部の歌「暗きより暗き道にぞ入りぬべき　遥かに照らせ山の端の月」（『拾遺集』）から採ったものだが、「暗きより、暗き道に入」る自分の姿を予見し、それを「鵺」と重ね合わせたのだろう。そして、和泉式部の歌のように、煩悩の吹き荒れる「心の闇」の中で懊悩する自分を仏法の真如の月によって照らし出し救ってほしいと願ったのである。ある伝承では、和泉式部はこの歌を作ることによって成仏したとするが、世阿弥もまた「鵺」によって「成仏」することを願ったのかもしれない。世阿弥は能という新しい芸能の創作によって、荒ぶるうち捨てられし神々や人々の「心の闇」を浄化しようと企図したのではないか。

## ■心理療法と瞑想で向き合う負の感情

2011年７月28日、濱野清志京都文教大学教授、永澤哲同大学准教授を発表者に迎え、ふだん分けて考えられることが多い心と身体は同じいのちが別々の現れをしているにすぎない、という心身一如の東洋的視点から、「気」をキーワードに心理臨床活動を考察した。

## ■研究会の記録

2011年７月24日、坂本清治氏発表「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」より。

――私が抱えている怒りやねたみといった負の感情、子どもたちが抱えているもの、それを認めて初めて次のステージがあるはずなのに、いまの学校の現場はその存在すら認めない。よく問題を起こす子がいる。悪い子ではないが、自分で考えない、決めない。「自分で考えても、どうせそうさせてはもらえないから、考える意味がないじゃないか」とふてくされる。親がずっとそういうふうに関わってきた。そんなやりとりをずっと繰り返していてふびんだった。そのとき、私は泣きながら、彼を大声で怒鳴りつけ、叩いた。いま14人の小中学生がいるが、周りでみな聞いているし、見ている。

## ■今後の課題

①感情の移り変わりの「あわい」に関する質的研究の深化、②負の感情に関する通文化的アプローチの模索、③災害をめぐる今昔の負の感情調査、この３つが今後の課題である。

研究プロジェクト

# こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究
## ――人類はこころをどのようにとらえてきたか?

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）＋ 奥井　遼（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定研究員）

### ■概要

人類は「こころ」をどのようにとらえてきたか、宗教・哲学・芸術・思想・科学の観点からアプローチし、「こころ」観の多様性を浮き彫りにしつつ、その多様性の中の共通原理に迫る。そのための基礎研究として、思想史的・比較文化論的な考察を加え、「こころ」観の変遷や多様性を俯瞰する。その際、霊長類からヒトへの進化の視点を念頭に置く。また、「こころ観」研究から抽出される論点を整理していく。

具体的には、日本列島に生きた人々がどのようなこころを持ち、こころについての思想を持ったのかを通史的に見てゆく。①縄文遺跡から見る日本列島人のこころ観、②弥生遺跡・古墳から見る古代人のこころ観、③古事記・日本書紀・古語拾遺などの神話と古代神道から見る日本人のこころ観、④仏教から見るこころ観、⑤儒教から見るこころ観、⑥近代日本のこころ観、⑦空海の「秘密曼荼羅十住心論」と最澄の「道心」（山家学生式）観などについて、研究発表をしながら議論し、考察を加えてゆく。同時に、サルやチンパンジーやゴリラとヒトのこころについての連関と差異について、またこころ観の文化差や地域差や時代差、あるいは精神疾患との関係について考察を加える。

この「こころ観の研究」によって、さまざまなこころ研究の思想的前提を確認し、共通の土俵作りや、それぞれの研究者のよって立つ位置の自覚を促し、多様性を認めつつ、「こころ」モデルを析出・整理する。

### ■2011年度活動実績

**Ⅰ　研究会・シンポジウム**

**・第１回研究会**

2011年５月16日、京都大学こころの未来研究センター小会議室２にて開催。詳細はワザ学の報告を参照。

**・第２回研究会（ワザ学研究会・負の感情研究会との合同研究会）**

2011年７月28日、京都大学東南アジア研究所東棟１階会議室107号室にて開催。発表は濱野清志京都文教大学教授、永澤哲同大学准教授、指定討論は井上ウィマラ高野山大学准教授、熊谷誠慈京都大学白眉プロジェクト助教。

脳科学、臨床心理学などの知見から、「こころ」とその変容の諸相について検討した。外界や内界のイメージそのものが刺激となって脳が動いていること、刺激を受けてから意識による認識までの間にタイムラグがあることから、「こころ」における情緒的・認知的な多様な働きを確認することができた。また、「トゥクタム」と呼ばれる、瞑想による身心の特殊変容事例の報告から、身心変容に関する技法の意義を明らかにした。

**・一般公開シンポジウム**

京都府・京都大学ころの未来研究センター主催、古典の日推進委員会後援で2011年11月23日、稲盛財団記念館３階大会議で「ワザとこころ～葵祭から読み解く」をテーマに開催。第１部は映像『京都歳時記　葵祭』上映と大重潤一郎監督（NPO法人沖縄映像文化研究所理事長）の講演「京の祭りと沖縄の祭りを比較して」。第２部はパネルディスカッション、嵯峨井建賀茂御祖神社禰宜・京都大学非常勤講師（神社祭祀研究）「下鴨神社（賀茂御祖神社）の葵祭と神饌」、村松晃男賀茂別雷神社権禰宜（NPO法人葵プロジェクト理事・事務局長）「上賀茂神社（賀茂別雷神社）の葵祭と競馬と葵」、やまだようこ京都大学大学院教育学研究科教授「京の祭りのワザとこころを探る」、司会は鎌田東二。

京都の伝統文化の根幹をなす古代からの祭り「葵祭（賀茂祭）」を通して、そこに内在する「ワザとこころ」を読み解いた。葵祭を支えてきた神官の語りから、京都を代表する祭りである葵祭における儀式、とりわけ「神饌」「走馬」に焦点を当て、その構造と物語の歴史的意味と今日的な意味を検討した。その際、単に京都の伝統文化を分析するばかりではなく、沖縄の「神の島」と呼ばれた久高島の伝統的祭祀などと比較することによって、より深く広く、「葵祭」の「ワザとこころ」のありどころを確認することができた。

**Ⅱ　「こころ」に関する語彙のデータベース作成**

2011年度のこころ観研究会では、「こころ」に関する語彙のデータベース化を図るため、岩波書店発行の「日本古典文学大系」全100巻所収の「こころ」に関する語彙を検討した。上古から中世まで約400件の文献を調査したところ、全文字数に対する「心」の頻出割合（パーミル）は、**表１**のように推移していることが明らかになった。

表1

| | 上古 | 中古 | 中世 |
|---|---|---|---|
| 歴史・神話・小説 | 0.19 | 0.394 | —— |
| 物語 | —— | 2.854 | 1.222 |
| 小説・説話 | —— | 1.216 | 2.609 |
| 和歌・歌謡 | 0.319 | 1.912 | 1.064 |
| 連歌 | —— | —— | 2.803 |
| 漢詩・漢文 | 0.745 | 1.272 | 0.791 |
| 評論・国学 | —— | 4.302 | —— |
| 日記・紀行 | —— | 2.092 | —— |
| 劇文学 | —— | —— | 2.876 |
| 随筆，随想・説教 | —— | 5.441 | 2.334 |
| 合計 | 0.2882 | 3.094 | 1.737 |

研究プロジェクト

# こころとモノをつなぐワザの研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）＋ 奥井　遼（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定研究員）

## ■ワザ学研究分科会「世阿弥伝書を読み論じる会」

京都大学こころの未来研究センター225会議室にて、毎月２回、河村博重（観世流能楽師、京都造形芸術大学客員教授）氏を交え、世阿弥の書き残した「伝書」を用いて、ワザを言葉によって記した世阿弥の思想および文体を読み解くことを行ってきた。

2011年度は、『花鏡』『至花道書』『申楽談義』の講読を行った。精読を通した議論によって、世阿弥における理論家・実践者・興行主としての多面的な語り口を分析することができた。

また、注目すべきトピックとして「世阿弥とオノマトペ」が挙げられた。謡曲のみならず伝書においても反復表現を用いた文体が散見される。伝書における「反復」を検討することは、世阿弥の文体を理解するための１つの糸口として提示できよう。

## ■研究会

**「ボディーワーク研究ことはじめ」**

2011年５月16日、京都大学こころの未来研究センター小会議室２にて開催。

発表は井上ウィマラ高野山大学准教授「テーラワーダ仏教におけるこころ観とこころを制御するワザについて」、熊谷誠慈京都大学白眉プロジェクト助教「チベット仏教におけるこころ観とこころを制御するワザについて」、指定討論は魚川祐司氏（ミャンマー・テーラワーダ仏教僧侶）。

瞑想の実践の分類と概要について報告を受け、今日のボディーワークとして活かす道を探った。報告によれば、瞑想はその内容によって40種類に分けられる（イメージする、死体とその腐敗する過程を見つめる、呼吸を見つめる、四無量心〈慈悲喜捨〉、食物摂取に関する厭わしさを想う、身体の要素分析〈地水火風〉、非物質性〈空間の無限性、意識の無限性、虚無性、非想非非想〉を想うなど）。その技法瞑想の実践における今日的意義を論じるための素地を固めることができた。

また、チベット仏教における「こころ」の概念を検討することによって、７世紀以降、北部インドでのみ盛んであった仏教諸学派の理論を効率的に整理しようと努力し、その中で、説一切有部、経量部、唯識派、中観派の順番に仏教哲学が深まりを見せていく、その形成過程を検討した。チベット独自の認識論は、こころを練り上げていくワザの諸相として意義深いことが示された。

**第２回研究会・ワザ学研究会・負の感情研究会合同研究会**

（詳細は「こころ観」報告書を参照）

**シンポジウム「沖縄・久高島のワザとこころ～その過去と現在」**

2011年11月24日、京都大学こころの未来研究センター大会議室にて開催。

大重潤一郎（NPO沖縄映像文化研究所理事長・映画監督）監督作品「久高オデッセイ 第二部 生章」（70分）、「水の心」（30分）上映後、大重監督「久高島のワザとこころ」、須藤義人沖縄大学専任講師（映像民俗学）「沖縄の民俗文化・祭祀芸能文化におけるワザの伝承について」、坂本清治久高島留学センター代表「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」の発表。指定討論はやまだようこ京都大学教育学研究科教授（発達心理学）。

「神の島」と呼ばれた久高島における祭祀の歴史的意義と現状、および久高島における山村留学の取り組みの紹介を通じて、久高島の暮らしの意義深さと苦労、ひるがえって、現代社会のあり方に対する問題提起を得ることができた。

「地球儀を少し回転すると京都ではなく沖縄が東アジアの中心に位置する」という大重監督の発言からは、近代の都市国家についての価値観を転換させる発想を、「人が人とすり合わせをするというか、付き合い、ぶつかり合って、初めて人は人になる」という坂本代表の発言からは、今日の教育における自然との付き合い、人との付き合いのあり方を問い直すきっかけを得た。

## ■フィールドワーク：能舞「弁財天マリア」「宇宙」

2011年３月21日、東京自由大学主催の春合宿（関西セミナーハウス）にて、能舞「弁財天マリア」の実演を行った。鎌田の法螺貝やアコースティックギター、歌唱に合わせ、河村博重師が翁面や女面を用いて舞った。震災の影響も冷めやらぬ中、苦悩や希求、慈愛の表現が強調的に感得された。

2011年６月７日、JAXA－京都大学連携パネルディスカッション（沖縄・コンベンションセンター）にて能舞「宇宙」を披露。最上の衣装を用い、上演中に２度、冠の付け替えをするなど、異例の演出。「影向の松」ともつかぬ月面映像により「この世のものでなさ」を現出。複式夢幻能の二重の世界が月面と地球に対照され、「我見（この世）」と「離見（あの世）」を「反映」「循環」するような舞を創作した。

能舞「宇宙」

研究プロジェクト

# 現代における自己意識・他者意識の研究

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

## ■プロジェクトの問題意識

これまで心理療法は、西洋の近代的自己意識や主体の成立を前提としたものであった。それは心理療法が19世紀から20世紀初めにかけて成立してきた事実にも反映されている。自分で自分を振り返る自己意識は罪悪感や劣等感などを生みだし、さらにそれは神経症的な葛藤や症状にもつながっていく。心理療法自体まさに自分を振り返る場として機能していたのであり、心理療法においては症状の生成にも治療メカニズムにも自己意識や内面の成立が基本的な前提条件とされてきたのである。

日本では、西洋ほど明瞭な自己意識がみられることは少ない。しかしその中で、箱庭療法の普及にも認められるように、ものに魂を認めるような前近代のあり方が残る日本人の意識の曖昧さも生かしつつ、自己意識を前提とした心理療法が行われてきた。ところが近年では、対人恐怖をはじめとするいわゆる神経症が激減し、解離性障害、暴力や自傷などの行動化、発達障害など、葛藤や自意識の問題が認めにくいケースが増加して、これまでの心理療法のパラダイムが通用しないことが多くなってきた。本プロジェクトは、こうしたこころの問題の変遷の背景にあると考えられる現代の意識のあり方を捉え、それがどのように新しい可能性に開かれているのかを考える上で、これまでの日本にみられた意識のあり方を参照し、より広い視点から検討を行おうとするものである。

## ■サブプロジェクト：『遠野物語』の新しい〈読み〉

このサブプロジェクトでは、臨床心理学者に加え、赤坂憲雄らの民俗学者、古代文学が専門の三浦佑之らの連携研究員が共に柳田國男の『遠野物語』を読み、20世紀初頭にみられた日本人の意識について多層的、多角的に研究を行っている。そのなかで東日本大震災を受けて、『遠野物語』第99話が検討された。これは明治29年の三陸大津波の際の話で、概要は以下のようである。

福二という男が大津波で妻子を失い、１年たった夏のはじめの月夜、便所に起きてみると、霧の中から男女が近づいてくる。女は亡くなった妻であった。思わずあとをつけて名を呼ぶと、振り返ってにこと笑った。男も同じ里の者で津波で亡くなったのだが、福二との結婚前に妻が心を通わせていた男だった。女は、今はこの人と夫婦になっていると言うので、福二が子どもはかわいくないかと問うと、女は少し顔色を変えて泣く。福二が悲しくなって足下を見ている間に男女は見えなくなった。追いかけてみたが、ふと死したる者だと気づき、夜明けまで考えて帰った。その後、福二は久しく煩ったという。

お盆は、亡くなった人と再び出会える機会として日本人のこころになじんできた。福二も初盆の夜に妻と再会する。目前に現れた妻を福二は追い、声をかける。今は別の男と連れ添っていると言う妻に、福二は子どものことを持ち出すが、妻は姿を消してしまった。このような物語の展開を考えれば、妻が福二の元に現れたのは、妻と再び「出会う」と共に、「別れ」を体験するためであったのかもしれない。津波は無残にも福二と妻をこの世とあの世に分断してしまった。けれども、このような物理的な別れは、必ずしも心理的な別れを意味するわけではない。妻が福二を置いて消え、最後に、男女が「死したる者」であると気づいたことで、福二と妻の別れは決定的となる。これこそ、福二がこころのレベルでも妻を「喪失」した瞬間である。そして、その後の福二の病が示すように、この喪失は、福二に妻の存在の大切さを教えるための「出会い」でもあった。

東日本大震災の大津波がもたらした途方もない被害を思ってみても、私たちのこころは、いくら物理的に離れてしまっても、大切なものとの別れを簡単には体験できないものと思われる。この物語の結末は、喪失を体験して生きる個人の苦悩を一方では映し出している。特に未曾有の災害では、どのように傷や悲しみを「癒やす」かということに目が向けられがちである。しかしこの物語は、人は本当に大切な存在を失ったとき、引き裂かれるような苦しみを通してこそ、その存在の大切さを真に体験するのだということを教えてくれる。福二という個人の「小さな物語」としては切なく悲しいこの話は、心理学的にはこのような「大きな物語」として読むこともできる。

もちろん、現実を生きる人々に関わる場合にはこうした「大きな物語」に沿わねばならないわけではない。我々は日本箱庭療法学会と日本ユング派分析家協会合同で震災対策ワーキンググループを立ち上げ、「ケアする人のケア」をテーマに活動してきた。こころの未来研究センターでは、畑中千紘助教と長谷川千紘研究員が事務局員として活動をサポートしてきた。その中で被災地で聞かせてもらった話は、個人の「小さな物語」には収まらないほど耐えがたいものであることが多い。

一方、この震災では、原発問題に代表されるように、これまで日本人のこころになじんできた“無常観”のような「大きな物語」でも収まりがつけられない問題も多く残っている。実際には「小さな物語」と「大きな物語」のはざまで、どのように収まりをつけられるかを個々が選択していくのであり、臨床的な支援はそれを支える役割を担わなければならないだろう。

研究プロジェクト

# 感情・認知機能に及ぼす他者・モノの影響

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）＋ 上田祥行（こころの未来研究センター研究員）

このプロジェクトでは、人間の感情や認知機能が、周囲に存在する他者やモノによってどのような影響を受けるのかを明らかにすることを目的として、行動科学の実証的な手法を用いて進めている。

## ■周囲にある笑顔がパフォーマンスを高める：続報

『こころの未来』第７号（2011）では、「当面の課題に直接関係のない、周辺に提示された喜びの表情写真が、ターゲットの検出と判断を、非常に早い時間帯で促進する」という実験結果が得られたことを報告した。画面の四隅に、にっこり笑顔の表情写真が提示されると、その直後に画面の中央に提示される多数の文字から、ターゲットの文字を見つける視覚探索課題の反応時間が、早くなるのである。この実験を始めたときは、課題に無関連な周辺の情報は、表情写真であれ他の画像であれ、課題（視覚探索）に対する注意を逸らし、パフォーマンスの効率を下げるのではないかと予想していた。しかし結果は予想とは逆に、喜びの表情写真が周囲にあると、ターゲットの探索課題の反応は促進されることが分かったのである。

次の問いは、周辺にある喜びの表情写真が、なぜこのような促進効果をもたらすのか、その機序はどのようなものなのか、ということである。この問いに答えを出すには、まず「反応を促進する」ことの中味を、もう少し詳しく分析してみる必要がある。そのために、この課題を遂行している実験参加者の「目の動き」を手がかりにして、視覚探索課題に対する判断過程の、どの部分が促進されたために反応時間が短縮されたのかを調べることにした。

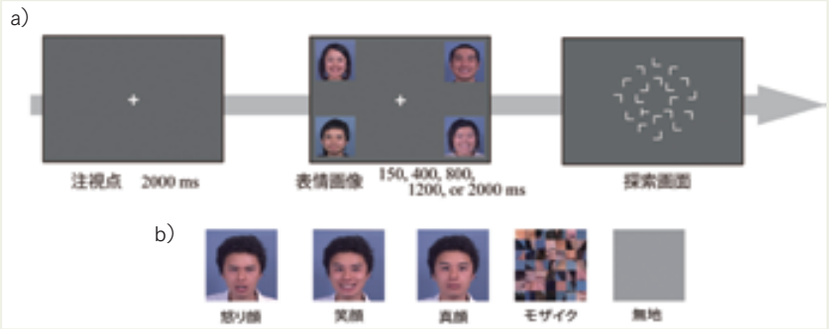



図１　a）実験の流れ図　b）周辺に提示される５種類の画像

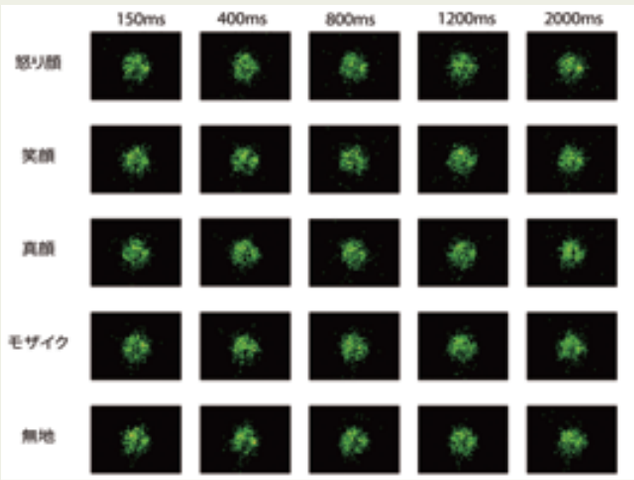



図２　目の停止位置の分布の様子

## ■眼球運動計測から分かってきたこと

図１はこの課題の流れを左から右の時間軸であらわしている。視覚探索課題の前にモニターの四隅に提示される画像は、怒り、喜び、中性の表情写真、モザイク様の画像、灰色の四角の５種類であった。モザイクや灰色の四角は、表情と比較するための統制条件である。Eyelink1000という装置を用いて、実験協力者の目の動きの詳細を記録し分析した。図２は、周辺に提示される画像の種類と、提示時間別に、実験協力者の目の停止位置（fixation points）を表したものである。人間の目は、短時間の停止（fixation）と、すばやく別の場所に移動（saccade）することを繰り返しながら、画面の情報を読みとっている。図２を見ると、どの条件でも、目は、等しく視覚探索課題の刺激の提示位置にとどまっており、周辺に移動するようなことはない。また、目の平均移動速度や、停止時間、最後の停止から反応キーを押すまでの時間のいずれも、視覚探索の反応時間とは相関しなかった。

一方、ターゲットを発見するまでの目の停留回数は、視覚探索の反応時間と強い相関を示すことが分かった。つまり、周辺に喜び表情が提示される条件での反応時間の促進は、停留回数の減少と関係していたのである。このことは、周辺に笑顔があると、１度の目の停止で処理される刺激の範囲（有効視野）が広がっている可能性を示唆している。

笑顔が人の課題遂行に影響するプロセスの詳細について、さらに分析をつづけてゆく予定である。

研究プロジェクト

# 共感的対話の相互作用性：カウンセリング対話の記憶

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）＋ 長岡千賀（こころの未来研究センター助教、現追手門学院大学経営学部准教授）

## ■聴き手の専門家としてのカウンセラーの特性

本プロジェクトは、心理療法のカウンセラーが行うカウンセリング対話に焦点をあて、カウンセラーの「専門性」とは何かを実証的に明らかにすることを目的としておこなっている。出発点になったのは、「人は自分の悩みをカウンセラーに語ることで、なぜその悩みを乗り越えることができるようになるのか」、「カウンセリングの専門家と、そうでない人とでは、話の聞き方にどのような違いがあるのか」という２つの疑問である。対話が人を変える力について調べてみたい、なぜカウンセラーの対話には、人を変える力があるのかを知りたい、というのが動機だった。

１つめの問いは難問だが、２つめの問いは、実証的な検討が可能である。２つめの問いについて調べることが、１つめの問いを知る手がかりになる可能性もある。そこで、これまで、カウンセリングのプロである臨床家と非臨床家の聞き方をさまざまな指標（発話時間、まばたき、身体同調など）を手がかりに比較分析してきた（『こころの未来』第７号）。

カウンセラーではない筆者らからみて、熟練のカウンセラーの優れた能力のひとつに、「長時間の対話の流れを正確に記憶すること」がある。50分間のカウンセリング対話のビデオ映像を見たあとで、どのような流れの対話であったかを話し合ってみると、カウンセラーは対話の内容を実に詳しく正確に記憶しており、とくにクライエント（相談者）の発話の記憶が詳細で驚くことがよくあった。対話内容の記憶の詳細さや正確さは、対話中の「聞き方」の反映でもあるだろう。そこで、カウンセリングの熟達者の特性を、対話の記憶という観点から調べる目的で、以下の研究を行った。

この研究には、４年以上の実践経験をもつカウンセラー（臨床家）11名（うち６年以上の経験を有する熟達者４名、６年未満の初心者７名）と、非臨床家12名が参加した。２つのカウンセリング対話のビデオ映像（各23分間）を視聴した後に、「クライエントの発話について思いだせるものはすべて書き出す」という再生課題を行った。

## ■クライエントの発話の記憶

実験に参加した臨床家と非臨床家の再生した文章を、対話の逐語記録と対応づけて分析し、発話の意味が正確に再生されている部分を「再生項目」としてカウントした。図１は、２つのカウンセリング対話（CaseA, CaseB）について、熟達者、初心者、非臨床家のそれぞれが再生した、平均再生項目数をあらわしたものである。図を見て分かるように、熟達者は、２つの対話のいずれについても再生項目が多く、非臨床家の1.5倍を超えている。一方、経験の浅い臨床家（初心者）は、２つの対話の間の再生数に大きな開きがあり、記憶しやすい事例とそうでない事例があることが分かった。また、非臨床家は、全体に再生項目数が少ないだけでなく、個人差が非常に大きいことも特徴的であった。

再生されたクライエントの発話内容の詳細を分析したところ、発話の中で、熟達者全員がとくに注目する部分があり、その部分の再生は非常によいことが分かった。たとえば、クライエントが大学で「弦楽のサークルに入っている。中学からずっとビオラを弾いていた」という、クライエントの性格を知る手がかりになる発話部分（図２）や、「コンビニで売っているプリンとかを夜によく食べる。ご飯を食べておなかいっぱいになったと思うけれどなんか食べてしまう」といった、クライエントの主訴を表現した発話部分などは、熟達者の全員が一連の流れを正確に再生していた。このことから、熟練のカウンセラーは、長時間のやりとりの中で、クライエントの内面を理解するうえでとくに重要な箇所を詳細まで記憶していることが分かった。熟達者の再生パターンが示す特徴は、クライエントの発話を理解する、熟達者のもつ「共通の枠組み」を表しているのではないかと考えている。

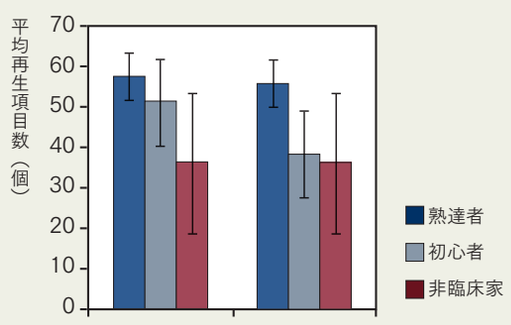
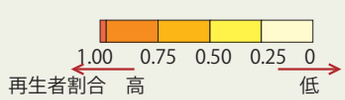



図１　臨床家（熟達者、初心者）と非臨床家の平均再生項目数




| No. | 再生項目 | 再生者の割合 | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 熟達者 | 初心者 | 非臨床家 |
| 26 | （仲介者の大学について） | 0.25 | 0.14 | 0.08 |
| 27 | (Th.) サークルとかは | 1.00 | 0.86 | 0.42 |
| 28 | 弦楽、なんです。 | 1.00 | 0.86 | 0.33 |
| 29 | 中学からずっと、 | 1.00 | 0.71 | 0.50 |
| 30 | ビオラを弾いてたんで。 | 1.00 | 1.00 | 0.75 |
| 31 | （高校のときもちょっと緊張感があった） | 0.25 | 0.14 | 0.08 |

図２　熟達者全員が再生した発話の一例

研究プロジェクト

# 社会的ネットワークの機能と性質：「つなぐ」役割の検証

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

本研究は、人と人とのつながり（社会関係資本）が形成される過程と、つながりの中でもたらされる社会的サポートの効果の検討を目的としている。本研究プロジェクトでは、特に農村コミュニティにおいて社会的ネットワークの構築において「プロ」の役割をもつ普及指導員に注目して検証している。本年度は特に、どのような性質あるいは行動様式をもつ普及指導員が社会関係資本の向上に寄与しているかを検証した。

## ■調査の実施

農村コミュニティにおいてネットワーク形成を支援することの重要性やそのための普及指導員のスキルについて検討するべく、2010年度に、全国農業改良普及職員協議会の協力を得て、全国の普及指導員を対象とした調査を実施した。さらに、2011年度に愛知県下の普及指導員への調査も行った。これらの調査の実施により、主に次の３点についての検証が可能になった。

第１に、2009年度の調査に参加した近畿の普及指導員にも改めて全国調査に参加してもらったこと、さらに2011年には前年度に全国調査に参加した愛知県の普及指導員に調査に参加してもらったことにより、近畿では2009～2010年度の、愛知では2010～2011年度の、パネルデータとしての時系列変化を検討することが可能になった。これにより、普及活動が農村コミュニティ内の社会的ネットワークの発展に実際に寄与しているかどうかを検討することができた。

第２に、全国の普及指導員を対象にした調査の実施により、2009年度の調査では得られなかったより詳細な検討を行うことができた。それは主にどのような特徴をもつ普及指導員が農村コミュニティにおける社会関係資本の向上に寄与しているかという分析である。

第３に、これに関連して、地域ごとに異なる効果の有無の検証である。

2011年度にはこの全国調査のデータの解析を完了させることができた。主な結果は下記のとおりである。

**１）**農業者同士の連携を促進するための普及活動、関係機関との連携を促すための普及活動、将来に向けてのビジョン提示のための普及活動、そして、地域の具体的な問題を指摘するような普及活動が特に効果を持ちやすいことが示された。この中でも、農業者同士の連携、ならびに関係機関との連携調整に関する普及活動は、農村社会の社会関係資本に関わる普及活動だと考えられる。なお、農業者同士の連携を促進するための普及活動は、１人の普及指導員の担当する農業経営体の数が平均的に多い都道府県ほど、効果的であることが確認された。

**２）**どういった特徴を持つ普及指導員が、コミュニティ内部の信頼関係（社会関係資本の一種）を高めやすいかを検討した。その結果、関係機関との連携活動に優れた普及指導員やコミュニケーション能力に秀でた普及指導員が、住民同士の信頼関係を高めやすいことが示された。また、普及指導員個人の特性だけでなく、普及指導員を取り囲む社会関係も重要な影響力を持ち、普及指導員とコミュニティの結びつき、そして普及指導員の職場の人間関係の良さも、コミュニティ内部の信頼関係を高める効果を持つことが示された。このことは、普及指導員を囲む「つながり」が、別の場所の「つながり」へと連鎖することを示唆している。

**３）**各普及指導員が対象としているコミュニティの生活レベルに、そのコミュニティの住民同士の信頼関係がどのような効果を持つかをパネル・データで検討した。その結果、住民同士の信頼関係が強いほど、そのコミュニティの生活レベルが高くなることが示された。この結果は、農村コミュニティにおける社会関係資本の重要性を示している。

**４）**どのような特徴を持つ人物が同僚から尊敬されやすいかについて、普及指導員と他の公務員（教員、技術職、事務職）を比較した。その結果、他の公務員と比べて普及指導員の間では、他者（たとえば農業者）の視点に立とうとする傾向（他者志向）、チームワーク、視野の広さに優れた人物が尊敬されやすいことが示された。また、普及指導員と教員の間では、技術職や事務職に比べて、情熱的な人物が同僚から尊敬されやすいことが示された。こうした特徴が普及活動において重要な役割を果たしていることが示唆される。

**５）**普及指導員の日々の業務の中での感情経験に影響する要因を検討した。その結果、普及活動に関わる知識・技術、コミュニケーション能力の高い普及指導員ほどポジティブ感情を経験しやすく、ネガティブ感情を経験しにくいことが見出された。特にポジティブ感情に関しては、知識や技術よりもコミュニケーション能力がより強い効果を持っていた。また、コミュニティ内部の信頼関係も普及指導員の感情経験に影響し、強い信頼関係のあるコミュニティで活動する普及指導員ほど、ポジティブ感情を経験しやすく、ネガティブ感情を経験しにくかった。

## ■対外活動ならびに成果の発表

2011年11月に開催された全国普及活動研究大会での基調報告とそのまとめ（「技術と普及」2012年２月号掲載）、書籍『農をつなぐ仕事』（内田由紀子・竹村幸祐、創森社）の出版、日本心理学会でのワークショップなどで成果を報告している。

研究プロジェクト

# 文化と幸福感：社会的適応からのアプローチ

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

## ■研究目的

日本文化は関係志向的、もしくは相互協調的であり、人々が「関係性」を重視していることが示されてきている。しかしその一方で、近年の日本においては、「ひきこもり」など、不適応感や対人関係の難しさとコミュニケーションの不全が取り上げられることも多くなってきている。

本研究では若者の幸福感と不幸せ感を検討し、心の健康と文化・社会的適応に関連する諸分野への貢献を目指す。さらに、日本文化の中で中心的に見られる現象だけではなく、一般的傾向とは異なる行動様式や価値基準を持つ若者たち（特にニート・ひきこもり・フリーター傾向の強い若者）を対象に調査を行うことで、若者の心の変化を検証する。従来の社会心理学・文化心理学は、集団内の「中心的傾向」を対象とし、文化内の分散はあまり考慮に入れられなかった。それゆえに、個々の文化の中で生じる適応・不適応がどのような形で表れるのか、またそのような文化の中心にはいない人たちの心理傾向については明らかにされていない。本研究では、適応感や不適応感を導く文化内の分散・個人差を考慮に入れた実証データの提示を試みることにより、より多層的な幸福感の有り様を明らかにする。さらに昨年度までのプロジェクト「青年期の社会的適応：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討」を継承し、実際に社会で起こっているさまざまな心の問題へのアプローチを視野に入れる。

本研究は、１）現代日本社会におけるコミュニケーション、自己価値の置き方、感情表出等を検証し、これらと幸福感の関連を調べる、２）ニートやひきこもりに関連する社会・文化的構造について、文化心理学による日米比較研究を通じて検討を行う、という２点を検討することを目的としていた。さらに2011年３月の東日本大震災を受けて、日本における幸福感についてより包括的な視点から考察する取り組みも行った。

これらの視点を組み合わせ、社会心理学的に動機づけ、自己観、態度などを分析することにより、日本におけるひきこもりやニートについてどのようにアプローチしていくべきかを検討し、得られた知見を社会に還元していくことが可能になると考えられる。また、アメリカなど他の地域と比較検討する視点を持つことにより、日本文化の持つ構造との関わりについて具体的に考察する。

## ■研究内容とその成果

**１）**ニート・ひきこもりと動機付けについての考察を深め、連携研究員のビナイ・ノラサクンキットとの共著論文の執筆・刊行に至った。2011年12月に発表された論文（Norasakkunkit & Uchida, 2011）は多くのメディアで取り上げられた。また、2011年５月31日にひきこもりを考えるワークショップ「映画『扉のむこう』上映会～「ひきこもり」に迫る～」を開催、ローレンス・スラッシュ監督らとともに、ひきこもりの心と社会についての討論を行った。

**２）**ニートやひきこもりに関連する社会・文化的構造について、文化心理学による日米比較研究を通じて検討を行った。特にニート・ひきこもり傾向と表情判断の関連を調べる実験研究を行い、ニート・ひきこもりリスクが高い学生は、ある人物の表情判断においてより周辺情報にも注意が向けられていることが示された（矢野・内田・増田，2012）

**３）**幸福感について心理学のみならず経済学や社会学の関係者とのディスカッションを重ね、現在日本の幸福の指標のあり方ならびに東日本大震災が幸福感と対人関係に及ぼした影響について検証し、論文での成果報告を行った（内田，2011〈日本計画行政学会論説賞受賞〉；内田・荻原，2012）。

**４）**近年の日本社会には個人主義的な傾向が、制度上あるいは心理傾向としても取り入れられていると考えられる。こうしたことが生み出す心理的な幸福感への影響について検討する実験と調査を実施した。実験研究においては、個人の成果が問われるような競争的環境（個人達成志向的環境）もしくは他者との調和が問われる環境（関係志向的環境）のいずれかを想起させ、その環境下での人間関係のあり方や幸福度を判断してもらった。すると日本において個人達成志向的環境は対人関係の結びつきを減じ、幸福感も低下させることが示された。さらには個人達成志向が強い日本人は、より幸福感が低いという、文化内での個人差も示された（内田・荻原，2012）。

## ■今後の検討課題

日本における社会構造の変遷と人の心の変化、幸福のよりどころについてより詳細に検討を行うため、実際に成果主義を導入してきたような企業におけるデータ収集を行い、心身の健康と幸福、そして個人主義的価値観との関連を調べていく方針である。

研究プロジェクト

# 癒し空間の比較研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

## ■癒し空間の定義

「癒し空間」とは、「人びとが、癒しを求め、癒しの効果があると感得され、信じられている空間」である。伝統的には、「聖地」や「霊場」や「巡礼地」などの聖なる場所を指す。そこでは、さまざまな宗教的行為――祈り、祭り、籠り、参拝、神事、イニシエーションなどの儀礼や修行（瞑想・滝行・山岳跋渉等）が行われてきた。

## ■研究目的

本研究プロジェクトは、日本における政治・宗教・文化・観光の中心を成してきた平安京・京都に形成されてきた寺社や聖地などの「癒し空間」を、宗教学・資源学・生態学・民俗学・芸術学・衣食住文化研究・認知科学・認知心理学・臨床心理学などの方法を用いながら総合的・多角的に研究し、世界各地の癒し空間との比較研究を試み、人に安らぎや崇高さを感じさせる場の特色とその心的メカニズムを突き止めることを目的とする。

癒し空間は、資源論・環境論・地域論・文明論の観点から見ても生態智を伝承してきた拠点としてきわめて興味深く、そこから抽出された特性は現代の心の平安を再検討していく際に多大のヒントを与えてくれる。人類文明の“安心”“安全”“安定”という「平安」の条件や機能を再検証し、再活用する可能性を示唆し、また京都府や京都市、他の地域との連携により、研究成果をシンポジウムやセミナーなどで社会発信していくことが期待できる。

## ■研究会と研究活動

2011年度は２回の研究会と２回の東日本大震災被災地の調査（2011年５月、10月）と近畿大水害に見舞われた天河大辨財天社の被害調査（2011年９月）を行った。

第１回研究会は2011年10月26日、須田郡司氏（写真家・京都大学地域研究統合情報センター共同研究員）「石の聖地の比較研究」、鎌田東二「水の聖地・天河大辨財天社の癒し空間と台風12号による被害状況報告」。第２回研究会は同年11月17日、小林達雄國學院大學名誉教授（縄文考古学）「縄文遺跡と延喜式内社～縄文中期最大の住居跡・岡田遺跡と寒川神社、勝坂遺跡と有鹿神社との関係について」、鎌田東二「癒し空間と延喜式内社の研究について」。

## ■癒し空間に伝承される生態智

「生態智」とは「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの技法と知恵」である。その生態智の集積した都市が、平安京以来1200年以上続く京都であると考え、それを「平安京生態智」と呼んでいる。

「生態智」は、ヨーロッパ諸言語で言えば「エコソフィア ecosophia」ないし「エコロジカル・ウィズダム ecological wisdom」であるが、それをわが国でもっとも早く明確なメッセージ性を持って使用したのが南方熊楠である。彼は明治政府が推進した神社合祀令に対して「エコロギー」という言葉を使って反対運動を展開した。神社合祀が地域文化と生態系を空洞化し破壊することを予見し、神社合祀は敬神思想を弱め、民の和融を妨げ、地方を衰微させ、国民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を害し、愛国心を損ない、土地の治安と利益に大害をもたらし、史蹟と古伝を滅却し、天然風景と天然記念物を亡滅する、百害あって一利なしの亡国的政策であると批判した。

一方、「生態智」を現代思想の根本問題と洞察したのがフェリックス・ガタリの『三つのエコロジー』（平凡社、2008年）である。ガタリはこの書で、環境のエコロジー（生物間の相互関係性や生物と環境との相互関係性をバランスさせる知と実践）、社会のエコロジー（いびつな病理的関係や偏差をともなう権力関係のゆがみや抑圧を取り除く解放の知と実践）、精神のエコロジー（イメージ操作を受ける現代人の主体的関係性の再創造であり想像力の動的編成）の３つを美的に総合する知を「エコソフィー（ecosophy）」と呼び、総合的なエコロジカル倫理学を提唱した。「エコソフィー」から見れば、環境も社会も精神もすべてつながりと循環の中でインターフェースしている。

## ■延喜式内社と寒川神社

「聖地」とは人々の祈りや祭りが奉じられる聖なる場所であり、人々の心に深い癒しや安らぎや救済をもたらす「癒し空間」でもある。そのような「聖地」や「癒し空間」のデータベースでわが国最古の「聖地」特集ともいえる文献が『延喜式』神名帳で、そこに記された相模国の古社13社の中でとりわけ格式の高い神社が寒川神社である。その寒川神社を中心にして、鎌田東二編『日本の聖地文化―寒川神社と相模国の古社』（創元社、2012年３月刊）を上梓した。本書では、日本列島の生成、地質・地形、生態系、地理、縄文遺跡・弥生遺跡・古墳時代遺跡と相模国の形成、寒川神社と延喜式内社の分布と遺跡との関係、寒川神社と方位信仰など、日本列島１万年の時空間の中に「聖地」や寒川神社や相模国の延喜式内社を位置づけ、聖地が聖地である理由を「聖地環境学」や「神社生態学」というべき新視点から解明した。

研究プロジェクト

# 発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

## ■プロジェクトの問題意識

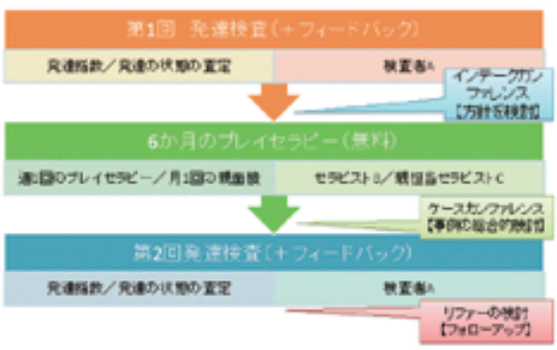
広汎性発達障害に対しては、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつあり、心理療法的アプローチは適さないとの見方もある。しかし、心理臨床の現場からは、発達障害についても心理療法の有効性が主張され、2000年代以降も多くの成功例が報告されている。それを受けて、われわれは「発達障害への心理療法的アプローチ」プロジェクトを立ち上げ、主に事例検討から、有効な心理療法のエッセンスを捉えてきた。そして、イメージや遊びの構造的変化に着目するなど、象徴解釈とは異なる視点からクライエントを捉え、「主体の発生」に立ち会う心理療法が有効であることを確認した（河合, 2010）。このような観点は、これまで臨床事例研究という方法で専門家に発信される場合が多く、社会的関心が高まった現在においても、発達障害への心理療法の有効性が広く理解されているとは言いがたい。

これに対して本プロジェクトは、医学研究科・十一元三教授と連携し、神経生理学的視点と心理学的視点を協働させて、発達障害の子どもへのプレイセラピーの効果を実証的に明らかにする調査研究を開始している。実践に基づきながら、これまで不足していた定量的知見を提示することで、より広範囲に心理療法の意義を発信し、発達障害への援助体制の確立に貢献できると考えている。

## ■発達障害の子どもへのプレイセラピーの実践と研究

当センターのプレイルームにて、発達障害の子どもを対象に、プレイセラピーの実践と研究を行っている。これは、６カ月間プレイセラピーを行い、（１）プレイセラピーの前後で子どもにどのような変化が生じるのか、（２）発達障害の子どもと非発達障害の子どもとでは、プレイセラピーのポイントはどのように異なるのか、という２つの観点から、発達障害の子どもへのプレイセラピーの効果を検証しようとするものである。

研究の枠組み




本研究は、訓練をうけた専門家・大学院生によりプレイセラピーが行われるため、研究自体が実践・サポートであり、同時にそれが実証研究のデザインによって強化されていくところに大きな特色がある。

平成23年度までに、11名の子どもを受け入れている。

## ■予備的研究から

これまでの予備的研究から、以下のような知見を得ている。

**（１）発達指数とプレイセラピーのプロセスの検討**

６カ月間のプレイセラピーを経て、子どもの発達にどのような変化が見られるのか、新版Ｋ式発達検査を用いて検討している。また、事例検討によってプレイセラピーのプロセスを細やかに検討することで、定量的には測れない変化を拾い上げようと試みている。プロセスの検討からは、セラピーのなかでのｉ）分離にまつわる不安の現れ、ii）二者関係における拒否／つながりの成立、iii）遊びに現れる融合と分離の契機、iv）遊びに現れる高さ・噴出の契機、といった遊びの構造的変化に着目することがポイントとして浮かび上がってきた。今後は、Ｋ式発達検査による発達指標のどの側面にどのような変化が見られるのか、プレイセラピーのプロセスとの関連から、より具体的に明らかにする必要があるだろう。

**（２）非発達障害の子どもとの比較**

発達障害と判断されてプレイセラピーに紹介されてくる事例のなかに、セラピーや保護者面接の経過から、非発達障害児と考えられる子どもが複数例見られた。社会的関心の高まりとともに、コミュニケーションの難しさなど表面に現れてくる問題から、そうではないのに、発達障害と判断される事例が増えている印象を受ける。発達障害と非発達障害の事例を比較することで、呈している問題の背景にある発達障害の本質を明らかにしていくことが必要と考えられた。

## ■今後の展開

今後は、予備的研究で得られた視点を基盤に、受け入れ事例を増やして、数量的・質的な検討を行っていく。発達障害へのプレイセラピーの効果が多面的に測定され、また、それが多くの事例に裏付けされて提示されることで、どのようなタイプの発達障害に対して、どのようなプレイセラピーが有効であるかが明らかになるだろう。本研究で得られた知見を、セミナー等で広く公開することで、学校や家庭などさまざまな場面で、発達障害の子どもへの関わり方にヒントを提供することができるのではないだろうか。

研究プロジェクト

# 発達障害と読み書き支援

小川詩乃（こころの未来研究センター共同研究員）＋ 吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

本プロジェクトでは、2007年11月から、小学校低学年の発達障害児を対象として継続的な学習面を中心とした支援に取り組み、あわせて、保護者との面談を通じて、保護者が子どもの状態をよりよく理解するための支援も行ってきた。さらに、児童の読み書き支援とあわせて、発達障害の認知特性を調べる基礎研究を行うことによって、より体系的な支援の構築を目指している。

2011年度には、それまで少人数の児童を対象に週１度の頻度で実施してきた支援のありかたを大幅に見直し、多数の児童を対象とした支援が可能な体制をつくるために、１人の児童に対する支援頻度を変更した。そうした変更に伴い、ひとりひとりの児童の家庭での学習について、保護者にアドヴァイスすることで、支援頻度の減少に対応できるよう工夫した。

学習支援の頻度は、支援を希望する保護者からの要望、支援に関わるスタッフの数などさまざまな要因のバランスを考慮して設定する必要がある。支援回数の変更が児童や保護者にどのように受け止められているか、アンケートを行った。

## ■支援の頻度と保護者の満足度

本プロジェクトを開始した2008年度は、週１度の読み書き支援を７名の児童に対して実施した。2011年度は35名を対象に支援を行った（ひとりの児童は２か月に１度の頻度で参加）。１回の支援は、児童への支援45分、保護者への支援15分である（表１）。

新たな支援体制に関する保護者の意見を把握するため,支援の頻度に関する希望を問うアンケートを行った（対象者は33名）。週１回の頻度で支援を受けたことのある保護者は、より多くの支援を希望しているのに対し、開始当初から支援回数が少なかった保護者は現状（２か月に１回）におおむね満足していることがうかがえた。

保護者による自由記述から、児童や家庭によって支援ニーズは異なることが示唆された（表２）。現在は小学校６年次までを区切りとして支援しているが、小学校卒業後も続けてほしいという意見も多く、長期的な支援が求められている。今後は、子どもや保護者の多様なニーズに応えられる長期的な支援体制を考えてゆく必要があると思われる。

表１　各年度における参加者数と支援頻度

| | 2008 年度 | 2009 年度 | 2010 年度 | 2011 年度 |
|---|---|---|---|---|
| 支援頻度 * | 週１回 | 週１回 | 月１回または月２回 | ２か月に１回 |
| 新規 | なし | 16 名 | ８名 | ８名 |
| 参加者合計 ** | ７名 | 23 名 | 30 名 | 35 名 |

* 遠方に住む等の事情がある場合は調整した。
** 前年度から継続して支援を受けている児童と新規参加児童の合計。

表２　保護者の希望する支援頻度とその理由

| 希望する頻度 | 具体的な理由 |
|---|---|
| 週１回<br>多ければ多いほどよい | ・（週１回だと習い事と同じなので）本人のペースが作りやすい。<br>・少しでも良い教育を受けさせたい。<br>・回数が少なくなってから、子どものイライラが増えた。ここに来ると帰ってからも機嫌がよく安定した気持ちが続く。 |
| 月１回<br>月２回 | ・忙しいので多すぎても大変だが、継続性や定着力を考えると回数が多くてもいいかもしれない。<br>・間があくと落ち着くまでに時間がかかる。<br>・あまり来なくなると忘れてしまう（前回話したこと等）。<br>・間があいてしまうと親は少し不安。少しでもいろいろ学んでほしいため。<br>・学校での問題行動をそのつど相談できるから。 |
| 現状どおり<br>（２月に１回） | ・本人・保護者ともに負担なく通うことができる。<br>・学校の宿題や習い事との両立を考えて。<br>・少し間隔をあけて評価していく方が子どもの成長した点や問題点を理解しやすい。<br>・今は現状どおりでいいが、問題が出てきたら頻度を増やしてほしい（問題が大きくならない間に解決できることはしたいから）。<br>・中学・高校に入ってからも長い期間関わってもらえたら。 |
| その他<br>（長期休みに集中させてほしい） | ・夏休みなど、何日も家にいると、保護者も子どももたなくなるために、外出できる場がほしい。 |

## ■支援の内容と研究成果および展望

これまで行ってきた活動を通して、発達障害児の読み書きに関わる認知特徴を整理し、テスト・バッテリーを組み立てて新たな支援課題を開発した。この成果の一部を日本LD（学習障害）学会の自主シンポジウムで発表している。また、コミュニケーションに関わる困難さの評価とそれに対する支援の実践、支援を受けることによる保護者の意識の変化を検討し、成果の一部を第23回日本発達心理学会のラウンドテーブルにおいて発表した。さらに、連携研究員の船曳ら（2011）によって開発されたMSPA（Multidimensional Scale for PDD and ADHD）を一部の児童に実施した。MSPAは、発達障害や注意欠陥多動性障害の特徴を14項目で診断し、ひとりひとりの障害を多面的に評価して支援に役立てるためのチャートである。MSPAを導入することにより、各児童の認知、行動の特徴をより明確に捉えることができるようになった。また、療育に参加している児童を対象に、発達障害児の表情認知特性を調べる基礎研究を行い、発達とともに怒り顔に対する感受性を獲得している可能性が示唆された。

今後も多様な視点を取り入れて支援効果の実証研究を継続するとともに、ひとりひとりの子どもに合った支援のあり方を探ってゆく。

研究プロジェクト

# こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

## ■こころの科学集中レクチャー

2009年度に開始された「こころの科学集中レクチャー」も３年めとなり、今回も北山忍先生（ミシガン大学：文化心理学）にコーディネータをお願いして３月２日、３日、４日の３日間にわたって実施した。北山先生とともにレクチャーの講師を引き受けてくださったのは、社会心理学の亀田達也先生（北海道大学）、行動遺伝学の安藤寿康先生（慶應義塾大学）である。本センターの集中レクチャーは、３名の先生がたが１日ずつ、午前、午後の講義を担当し、それぞれの講義の後で、まず講師の間でディスカッション、それに受講生とのディスカッションが続くというセンターオリジナルのプログラムである。双方向のやりとりを重視したこの形式は、１回目から変わっていない。申し込み制で参加した受講生は、理系、文系の学部１年生からポスドクの研究員、さらに他研究科や他大学の教員まで、年齢の幅も、専門領域も多彩である。その分野の先端をゆく講師陣による密度の濃い講義と、熱気にあふれたディスカションを堪能した３日間だった。

## ■講義のキーワードは、分配の正義、集合知、行動遺伝学、文化神経科学

亀田先生の講義では、John Rawls の『正義論』に代表される、「正義」をめぐる規範論的な立場（～すべし）と、人間行動に関する実証的な知見（～である）とは、はたして接合させることは可能なのか？という問いを軸に、両者の対立はどう乗り越えられるのか、という視点から議論した。

安藤先生の講義では、多数の双生児を対象とした膨大なデータに基づく、行動遺伝学の基礎についてレクチャーした後、ひとりひとりの遺伝情報から個人の健康や能力を予測する「パーソナルゲノム」時代が近づいてきている現在、個人の自由と平等をどのように考えたらよいか、という観点から議論した。

北山先生の講義では、遺伝子の発現に関わる生理的なメカニズムに、さまざまな社会的、環境的な要因が関与している可能性を示す最新の研究を紹介し、ゲノムと文化との相互作用に関する研究の将来像をめぐって、議論した。

## ■受講生の感想から（抜粋）

• 学部生の私にとって、正直ついていくのが精いっぱいのレベルでしたが、難し過ぎるというわけではなく、頭をフル回転させて眺める、非常に楽しい時間でした。ふだんの授業ではどうしても受身になりがちですが、今回は活発に議論が行われている中で、自分も「疑問点を洗いだそう」「何かコメントできることはないか」と、積極的に取り組むことができました。（文系学部生）

• 遺伝子レベルのミクロな機構から、マクロな機構、そして人の観念や信念といった、人々の頭の中で創出される世界（認知的世界）との間の相互関係を、異なる専門分野の視点から批判的に厳しく議論を戦わせることによって、より理論を精緻化するとともに、新しい考え方や発想が生まれてゆく過程に参加することができ、「このように研究が生まれてゆくのか」ということを実感できました。（文系大学院生）

• 私が理解しようとしている間にぽんぽん話が進んでしまい、追いつけずに何だか悔しかったです。私は話を聞いてその内容に対して全部「ああ、なるほど」と思うばかりだったので、まわりの先輩方が内容に関して質問をしたり、つっこみを入れたりするのを見て、私にはそのような着眼点がなかったな、など気づかされることがいろいろありました。またこのような機会に参加させていただくことがあれば、ディスカッションに参加してリベンジしたいと思います。（理系学部生）

• 社会科学と自然科学との融合がますます進んでいくような印象を受けた。遺伝子、脳の研究があと数十年は続いていくように思った。より自然科学的な従属変数を扱うには、理論と、結果の妥当な解釈とを整合させることが大事だと思った。研究の楽しさというか、先生がたのモチベーションに触れられたように感じた。（文系大学院生）

研究プロジェクト

# 東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

## ■研究の概要

2011年３月11日、東日本大震災という未曾有の災害が発生した。地震・津波・原子力発電所の事故という３つの要素による複合的かつ甚大な影響をもたらす災害を経験したことで、日本における幸福感のあり方、社会関係のあり方は、被災地ではもちろんのこと、その他の地域においても変化した。

本研究プロジェクトでは、東日本大震災関連プロジェクトとして、宗教学・民俗学のアプローチから「こころの再生に向けて」の取り組みを行った。具体的には、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、鈴木岩弓東北大学教授が事務局の「心の相談室」、島薗進東京大学教授が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲場圭信大阪大学准教授が共同代表の「宗教者災害支援ネットワーク」などとの連携を保ちながら、①伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生、③脱原発社会の社会デザイン・世直しのありようを模索した。その際、①宗教的「世直し」思想と実践事例の解明とともに、②21世紀文明のありかた、③その中での日本文明の位置とありかた、④そこにおける伝統文化（祭り、芸能、芸道、宗教など）の継承と活かし方、⑤自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再発見・再評価と再構築、⑥聖地などの安らぎや浄化をもたらす「癒し空間」の活かし方、などに焦点を当てつつ考察した。

## ■研究計画

**(A)**「心の相談室」「宗教者災害支援連絡会」「宗教者災害支援ネットワーク」などの活動の追跡と連携：東日本大震災後の宗教者の災害支援活動について追跡調査し、整理する。

**(B)** 伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア：伝統文化の精神・身体技法の活用法を調査・整理し、必要に応じてネットワーク化する。

**(C)** 伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生：聖地文化を含む伝統文化や民俗芸能・芸術が被災地の復興にどのように関与するかを調査すると同時に、支援のあり方を実践的に探る。

**(D)** 世直し思想と実践の解明：宗教的世直し思想と実践の歴史的事例の検証とその現在形を探る。

## ■活動報告

**（１）**2011年５月２日～５月５日、東日本大震災の被災地を巡って：こころの未来研究センターのウェブサイトに報告文掲載。また鎌田東二『現代神道論――霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年11月刊）第４章に収録。

**（２）**2011年６月18日、東日本大復興祈願並び犠牲者慰霊大採燈祭（福島県相馬市）：こころの未来研究センターのウェブサイトに報告文掲載。また鎌田東二『現代神道論』第４章に収録。

**（３）**2011年６月19日、宗教者災害支援連絡会・第３回情報交換会（東京大学仏教青年会）：今起きている問題の１つに被災地格差や避難所格差などの問題がある。福島県と、宮城県・岩手県・青森県の被災地とでは大きく事情が異なる。同じ福島県でも避難地区と警戒地区とそれ以外の地域では事情も思いも異なる。原子力発電所の事故を抱えた福島県の問題は複雑で、微妙で、深刻である。宮城県や岩手県や青森県は、100日が過ぎて、遅れているとはいえ復旧・復興への青写真と作業が進みつつある。だが、福島県ではそのような復旧・復興デザインが描けない。また、「風評被害」と呼ばれる問題も含め、情報の伝達や判断の困難さが行動を逡巡させ、生活全般を息苦しく、重苦しくしている。

「宗教者」とは何か、「宗教者」ができることは何か、必要とされていることは何か、具体的な個々の活動報告を検討しつつ問題点を整理し、宗教が持っている安らぎや救いや癒しや覚悟のはたらきをどのようなかたちで発揮していくのか、個々の社会実践とともに、幅広い考察や探究が必要でもある。そうした考察や探究に、本研究プロジェクトやモノ学・感覚価値研究会が関与し寄与できるところがあるはずだ。

**（４）**2011年７月20日、「京都大学シンポジウムシリーズⅣ：宗教と災害～東日本大震災の現場からの報告と討議」を開催。第１部　コーディネーター・司会：鎌田東二による趣旨説明、基調報告：島薗進教授「『宗教者災害支援連絡会・情報交換会』の活動と課題」、玄侑宗久福島県三春僧侶（作家）「福島県での被災状況と被災地支援の現状および復興構想会議の問題点」、事例報告：稲場圭信准教授「『宗教者災害救援ネットワーク』の活動と課題」、金子昭天理大学教授「新宗教の災害支援活動の事例と課題」。第２部　指定討論：河合俊雄こころの未来研究センター教授、内田由紀子同准教授。

**（５）**2011年10月10日～13日、11月６日、東日本大震災被災地追跡調査：こころの未来研究センターウェブサイトに報告文掲載。

**（６）**2011年９月６日・９月12日、天河大辨財天社被災状況報告、2011年11月１日～11月２日、天河大辨財天社被災状況追跡報告：「モノ学・感覚価値研究会」ウェブサイトに報告文掲載。

研究プロジェクト

# 東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

## ■研究目的

2011年３月11日に発生した東日本大震災は、さまざまな面においてかつて経験されたことのない被害を生みだした。地震・津波・原子力発電所の事故という複合的要素がもたらす甚大な災害を経験したことにより、日本社会全体として価値観の変化が経験され、大きな岐路に立たされた（内田・高橋・川原、2011）。

地震の規模の大きさ、さらには目に見えない放射能の広がりが指摘されるなか、被災地や原子力発電所の事故に関する情報伝達に関して、人々の判断に及ぼしたメディアの役割は大きい。

そこで本研究では、まず第１に、日本における震災報道についてのテレビ、新聞の内容分析を行った。どのようなことが、どのような形で伝えられたのかを知ることは重要である。とりわけ、オリンピック報道を分析した先行研究では日本の報道の特徴としてバランス志向性が見られ、基本的にはポジティブな内容が多いオリンピック選手報道についても、「怪我」や「メンタル面での不安」などのよりネガティブな内容も伝えられる傾向があることが示されているが（Markus, Uchida, Omoregie, Townsend, & Kitayama, 2006）、①このようなバランス志向性が災害というネガティブな事態においても見られるのかどうかを検討することを主軸として検討した。また、特にテレビにおいては、②被災者やキャスターのコメントを事実報道の後に付加することにより、客観的情報に関する色づけがなされる傾向にあることについても検討した。さらには、③震災後の時期によっても報道の内容が変わっていくことが想定されるので、時系列での変化も検討した。

第２に、本研究では、報道関係者へのアンケート調査を実施した。報道はとりもなおさず個々の記者の取材が素材となっている。とすれば、個人がどのような意図、思いを持って報道に携わっていたのかを知ることは重要である。日本のメディア全体が共有したこの未曾有の事態に対する認識を理解し、報道の送り手・受け手双方にとって今後に活かせるような知見を得ることを目的として実施した。

## ■研究内容とその成果

１）テレビと新聞報道についての分析を行った。分析時期はフェーズ１が震災直後（３月12日 - ３月31日）、フェーズ２は新学期から１カ月後までの期間（４月１日 - ４月11日）、フェーズ３は３カ月後に至るまでの期間（５月15日 - ６月15日）、フェーズ４は半年後を含む期間（８月30日 - ９月30日）とした。それぞれの期間のうち月・水・金の報道を抽出し、報道されたセンテンスの一つ一つを分析した。結果、テレビ報道については、事実報道は全体の51.1％含まれており、うちネガティブな情報は半分程度となっていた。新聞報道ではニュートラルな事実に関する文章が全体の42.6％、ネガティブな事実の報道は26.9％であった。これだけの災害時であってもニュートラルな情報も多く含まれていたことが明らかになった。

また、テレビのほうがより事実とそれに対する反応が組み合わせられて伝えられており、それによる受け手の事実誤認などの認知バイアスが生じやすい可能性もある。フェーズ分析からは、時間が経つにつれて事実のネガティブ報道は減少したこと、原発報道も減少したこと、逆に被災地の報道にシフトしていったことが明らかにされた。また、震災後１カ月には涙を誘うようなエピソードが放映される傾向も見られた。

２）さまざまな機関に所属する報道関係者に調査を行った。回答者数は、全体で115名（男性55名、女性13名、無回答47名）。年代は20代から60代までであった。調査は（１）原発報道の取材経験に関する設問、（２）その他一般の震災関連報道の取材経験に関する設問、（３）災害報道等一般的質問、（４）自由記述、からなっていた。その結果、偏らない報道姿勢は回答者の過半数が意識していたが、特に原発事故報道ではその意識が高かった。また、政府や東電といったリスク管理者から得られた情報、たとえば事故対応や避難指示のあり方などについて、多くの報道関係者が批判的視点をもって報道しようとしたことがうかがえる。また、「できあがった報道が事実に忠実であったか」は、原発事故以外の一般震災報道では８割近くが「非常に」あるいは「かなり忠実」と回答していたのに対し、原発事故報道では、５割に留まり、逆に「事実を描ききれないところがあった」という回答が35％に達した。

## ■今後の検討課題

できあがった報道と、記者の意識との関連を具体的に検討する。また、テレビにおける特徴（事実を伝えた後コメンテーターがコメントする）が視聴者の認知に与える影響を検討する。

研究プロジェクト

# 近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究

秋丸知貴（美術史家）

## ■ポール・セザンヌと蒸気鉄道

本研究プロジェクトは、図像解釈学（イコノロジー）を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象化傾向に近代技術的環境における心性の変容の影響を調査することを目的とする。2010年度は、近代技術による心性の変容の近代絵画への反映を総論的に分析した。2011年度は、特に個別研究としてポール・セザンヌ（1839-1906）への蒸気鉄道による視覚の変容の感化の問題を考察した。

## ■セザンヌが汽車から眺めた車窓風景

まず、フランスで初めて本格的に旅客用の蒸気鉄道が運行されたのは、セザンヌが生まれる２年前の1837年である。1842年には鉄道建設を法的に支援する「鉄道憲章」が制定され、第二帝政期（1852-1870）の間に首都パリと主要地方都市を結ぶほぼすべての幹線路線が整備されている。一方、セザンヌが最初に蒸気鉄道で長距離旅行したのは、22歳で故郷エクスからパリへ初上京した1861年である。それ以来、晩年までセザンヌは頻繁に蒸気鉄道を利用して、エクスとパリはもちろんフランス各地を転住する生活を送っている。したがって、セザンヌは蒸気鉄道による視覚の変容を自明的に感受し、肯定的に享受する最初の世代に属すと推定できる。

事実、セザンヌは1878年４月14日付エミール・ゾラ宛書簡で、疾走する汽車から眺めた車窓風景を次のように賛美している。「蒸気鉄道（le chemin de fer）でアレクシ邸の傍を通過する時、東の方角に目の眩むようなモティーフが展開する。サント・ヴィクトワール山と、ボールクイユに聳える岩山だ。僕は、『何と美しいモティーフだろう（quel beau motif)』と言った」。

ここでセザンヌが賞賛しているのは、エクス＝マルセイユ鉄道路線のアルク渓谷に架橋された鉄道橋を通過する時の車窓風景である。この手紙が書かれたのは、このエクス＝マルセイユ鉄道路線の開通（1877年10月15日）のわずか半年後である。また、セザンヌがモティーフとしてのサント・ヴィクトワール山に言及したのは実に40歳を目前にしたこの手紙が最初であり、この山を中心画題とする連作もこの手紙が書かれた1878年以後に開始されている。そして、セザンヌはこの連作にそのアルク渓谷の鉄道橋と汽車を描き込んでいる。つまり、セザンヌのサント・ヴィクトワール山連作は、このアルク渓谷の鉄道橋通過時の鉄道乗車視覚に触発されて開始された可能性が非常に高い（筆者が撮影した現場動画を参照。http：//www.youtube.com/watch? v＝BAAAuOoEKPI)。

## ■蒸気鉄道による視覚の変容

実際に、セザンヌの造形表現における10の様式的特徴は、蒸気鉄道による視覚の変容の様式的特徴と詳細に類似している。まず、「視点の複数化」と「対象の歪曲化」は、走行車内における視点の移動と、それによる視界の不明瞭化に呼応している。また、「構図の集中化」と「筆致の近粗化」は、汽車の車窓では遠景の対象ほど視野中央に長く留まり、近景の対象ほど視野外に素早く飛び去ることに対応している。さらに、「運筆の水平化」は、平行に逆走する車外風景や、横ぶれする車内状景における対象の残像現象に相応している。また、「前景の消失化」と「画像の平面化」は、乗客の風景からの視覚的疎外化に照応している。さらに、「形態の抽象化」と「色彩の純粋化」は、車輪線路と蒸気機関の抽象運動による視覚の単純化に一致している。そして、「共感の希薄化」は、鉄道旅行における傍観者的感受性の胚胎と合致している。

これに関連して、ヴォルフガング・シヴェルブシュは『鉄道旅行の歴史』（1977年）で、鉄道乗車視覚と印象派的造形表現の類似性を主張している。現実に、セザンヌと交流のあった印象派のエドガー・ドガ（1834-1917）は、1892年に鉄道乗車視覚の影響を公言する風景画連作を制作している。「（その21枚の風景画は）今年の夏の旅行の成果です。私は列車の扉口に立ち、不明瞭に眺めていました。それが、私に風景画を描く着想を与えたのです」。

これらのことから、セザンヌやドガの絵画作品を、人類史的な近代技術による視覚の変容の美的・文化的・歴史的証言記録として再評価できる。なおこの場合、鉄道乗車中の車窓風景をそのまま描写するよりも、降車後の風景に蒸気鉄道による視覚の変容を適用して描出する方が、近代的視覚の内面化とその創造的昇華において芸術的重要性を持つと指摘できる。

## ■研究の成果

本研究プロジェクトは、2010年から2012年にかけて口頭発表を14件（学会12件、研究会２件）、論文発表を学会誌等で14件（査読有り10件、査読無し４件）行った。また、2011年度形の科学会奨励賞を受賞した。そして、研究成果の一部である『ポール・セザンヌと蒸気鉄道――近代技術による視覚の変容』により、京都造形芸術大学大学院より2011年度博士学位（学術）を授与された。

研究プロジェクト

# モノと感覚移入・感情移入に関する基盤研究

大西宏志（京都造形芸術大学准教授）

2011年度にはシンポジウム、展覧会の開催、研究報告誌の出版、ポスター発表などを行った。

## ■シンポジウム

2011年11月12日、遊狐草舎（京都市北区）にて、「触れることで情報を接地する試み」をテーマとしてシンポジウムを開催した。講演者は渡邊淳司共同研究員（NTTコミュニケーション科学基礎研究所）、松井茂東京芸術大学特任講師。

作家が素材や制作物に感覚・感情を移入する制作過程における、物と感覚・感情移入の関係性を、デジタルファブリケーション技術の事例研究を通じて検証した。３次元プリンタによってもたらされるものは、素材や形状との連続的な出会いであるモノづくりの過程ではなく、記号（設計図）と物質（制作物）の関係づけの変容と考えられる。また、鑑賞者がどのように作品に対して感覚・感情を読み取るのか、演出としての物と感覚・感情移入の関係性を、ワークショップの事例報告（心臓ピクニック：聴診器を自身の胸に当てて鼓動を計測し、それを心臓ボックスから音と振動として出力。そうすることで、参加者は自身の鼓動を音として聞くだけでなく振動として触れることを体験する）を通じて検証した。

## ■出版

2012年３月刊行の『モノ学・感覚価値研究』第６号（京都大学こころの未来研究センター、モノ学・感覚価値研究会）に、上記のシンポジウムの内容を掲載した。

## ■展覧会

2011年11月11日～13日、遊狐草舎（京都市北区）で展覧会「物気色11・11」を開催した。

全体のテーマは「モダンの死角、モノケハイをアートに依せて」で、出品作家は大西宏志、大舩真言、狩野智宏、上林壮一郎、近藤髙弘、スティーヴン・ギル、坪文子、山田晶、山本健史。

展覧会開催中にシンポジウムも行った。その講演者は鎌田東二、山本豊津（東京画廊）、原田憲一（元京都造形芸術大学教授）、稲賀繁美（国際日本文化研究センター教授）、小崎哲哉（美術ジャーナリスト）の各氏。

「物気色11・11」はモノ学・感覚価値研究会アート分科会が一貫して行ってきた、ものと美術の関係を探る研究会的な展覧会である。人間は、日常、非日常を問わず物を作りだし、物に囲まれながら生きている。特に私たち日本人は「心を込めた物作り」や「物から心の動きを読み取る」と言うように、物に物質以上のニュアンスを見出し、心との強い関係性を感じることができる。このことを表現実践とシンポジウムによって検証した。

## ■ポスター発表

こころの未来研究センター研究報告会2011「こころを知り未来を考える～絆がつくるこころ～」にてポスター展示を行った。

研究プロジェクト

# 察するコミュニケーションと表すコミュニケーション

宮本百合（ウィスコンシン大学准教授）

## ■本研究の目的

コミュニケーションを行う際、人は言葉だけでなく、表情・身振り・状況などの手がかりも用いてお互いの感情や意図を伝えあい、理解しあっている。このようなコミュニケーションは、非言語的コミュニケーションと呼ばれている。低コンテクスト文化である欧米では、直接的で明確な言葉を用いた言語的コミュニケーションが多いのに対して、高コンテクスト文化である東洋では、間接的で周辺的情報などの手がかりを用いた非言語的コミュニケーションが多いことが、文化人類学者のHallらによって示唆されてきた。とはいえ、欧米においても、表情などの非言語的な手がかりは、言葉の内容以上に重要であることが指摘されている。

この一見矛盾する知見を理解するために、ウィスコンシン大学大学院生アマンダ・エゲンと心の未来研究センター内田由紀子准教授と私は、非言語的コミュニケーションの目的の違いに注目して研究を行っている。自己を表現することが重視されている欧米では、自らの意図や感情を他者に対して明確に「表す」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。一方、相手や周りに自分を合わせることが重視される日本では、他者の意図や気持ちを「察する」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。だとすると、非言語的コミュニケーションの性質は文化によって異なっている可能性がある。自らの意図や感情を表すことが主な目的である欧米では、送り手が自らの意図や感情を比較的直接的に表現できる身体的な手がかりが用いられがちなのに対して、他者の微妙な意図や感情を察することが主な目的である東洋では、場の雰囲気などの、間接的で文脈的な手がかりが用いられがちであるという仮説を立て、それを検証するために日米で調査を行ってきた。

表１　非言語的コミュニケーションの媒体

| 身体的媒体 | 文脈的媒体 | その他 |
|---|---|---|
| 表情（笑顔、しかめっつらなど） | 状況（天気、場の雰囲気など） | 言い方（語調、間など） |
| 振る舞い、ボディランゲージ（鼻歌、うつむく、ため息など） | その状況にいたらたいていの人がどのように感じるか | 間接的な言葉 |
| | 実際に経験している状況を見て | |

## ■これまでの活動

ウィスコンシン大学のアメリカ人学生と、京都大学の日本人学生を対象とした比較調査を行った。まず参加者に、自らが実際に経験した非言語的コミュニケーション場面を想起し詳しく記述してもらい、その後、様々な非言語的コミュニケーション媒体（表１参照）をどの程度用いたかを評定してもらった。図１からわかるように、アメリカでは送り手が自らの感情・意図を表現できる身体的媒体が他の媒体より多く用いられているのに対して、日本では身体的媒体も用いられていたものの、場の雰囲気などの文脈的な媒体がアメリカよりも多く用いられていた。

このような結果は、非言語的コミュニケーションの媒体に文化差があることを示しているが、伝達される内容にも文化差はあるのだろうか。その点を調べるために、参加者に記述してもらった場面の内容を分析した。その結果、アメリカでは約90％、日本では約50％の非言語的コミュニケーションにおいて、好意・怒り・悲しみなどの明確な感情が伝達されていたのに対して、日本の約40％、アメリカの約10％の非言語的コミュニケーションが、「時間がないので急いでいる」といった、送り手の必要性が伝達された場面であった。

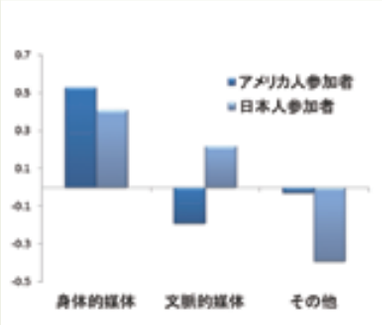



図１　非言語的な媒体が用いられる相対的程度

## ■まとめ

これらの結果から、アメリカでは、送り手が自らの感情を積極的に表現するために、身体的媒体を用いた非言語的コミュニケーションが多く使われているのに対して、日本では、送り手の必要性を察するために、場の雰囲気などの文脈的媒体を用いた非言語的コミュニケーションが多く使われていると言える。つまり、非言語的コミュニケーションは日米のどちらにおいても重要であるものの、その目的や用いられる非言語的な手がかりには、文化間で差があることが示された。

従来、非言語的コミュニケーションは、欧米よりも東洋において多く用いられていると示唆されてきたが、本研究の結果に基づけば、非言語的コミュニケーションのどの側面に注目するかによって、欧米人の方が東洋人よりも非言語的コミュニケーションを多く用いる場合もあることが示唆される。

今後は、本研究をさらに進めて、文化間で性質の異なる非言語的コミュニケーションに参加することで、異なる心的傾向が促進されるようになるかどうかを検証する予定である。

研究プロジェクト

# こころの研究ニュースの発信：こころ学ブログ

平石　界（安田女子大学心理学部講師）

## ■プロジェクトの目的

心理学と、心理学に関連するさまざまな研究を、大学１、２年生や高校生など、これから大学で学んでいこうとする人たちに紹介したい。研究の結果をただセンセーショナルに伝えるのではなく、結論に至るまでの研究者の苦労、葛藤、遊び心、良い結果が出たときの喜びまでを、堅苦しくも見える“学術論文”の行間から読み解いてみたい。そうして、いわゆる“心理テスト”でイメージされる“心理学”とは異なった世界が存在することを伝えたい。そのような気持ちをもって「こころ学～こころについて語るときに、我々の語ること」というブログを書いてきた。本報告では平成20年11月ブログ開設から平成24年３月末のプロジェクト終了までの活動を総括したい。

## ■ブログへのアクセス解析から

平成21年３月５日よりGoogle Analyticsを設置し、ブログへのアクセスデータを収集してきた。プロジェクト終了までの総訪問数は25,054であるが、この中にはIPアドレスなどから同一人物による複数回の訪問と推測されるものが含まれる。そこで同一人物をGoogle Analyticsのアルゴリズムにより推定すると、ユーザの数は15,042人であったと考えられる（同一人物が職場と自宅などで異なるデバイスやIPからアクセスすると別人扱いになるので、これは高めの推定値である）。１回の訪問で複数のページを閲覧することがあるので、これらを別々にカウントしたページビュー数となると39,856になる。

約４万のページビューすべてで、記事が読まれていたかというと、残念ながらそうは言えない。各ページの平均滞在時間は１分７秒となっており、全ページビューの約５割になる20,994ページビューが０-10秒の滞在となっていた。記事に目を通したと考えられる180秒（３分）以上滞在した数は11,556ページビュー（全体の29.9%）であった。

ブログへのアクセス元は国内では北海道（訪問数822）から沖縄（82）まで広がっていたが、中心になったのは東京（7,263）、神奈川（1,471）、大阪（2,414）、京都（2,653）、福岡（2,183）など大都市圏であった。また沖縄からの訪問では滞在時間は平均27秒であり、検索エンジンなどからの一時的な訪問であったと推測される。

以上をまとめれば、３年間で、ブログ開設した当初に期待したほどのアクセスを得ることはできなかったと認めざるを得ない。次節では、その原因について検討したい。

## ■アクセス数が伸びなかった理由

もっとも大きな原因はブログの更新頻度が低かったことであろう。年間で10本程度、月１本に満たない記事の投稿ペースでは遅かったことは否めない。メンバー３名ともが、研究者として業績を積み上げることが必要な立場であり、そのことが本ブログのような（いわば、アカデミックな業績としての価値は無に等しい）活動の足を引っ張った面は否めない。何よりも、それを踏まえた上でプロジェクトに取り組む覚悟が、プロジェクト代表者に欠けていた。

他の原因として、一つ一つの記事が比較的長く、また噛み砕いたつもりであっても、まだまだ表現が難解であったのかもしれない。しかし、それぞれの研究の目立つところだけを表層的に取り出して面白おかしく伝えることは、本ブログの目指すところではなかった。そのため、記事がある程度の長さになってしまったこと、上から下に目を動かすだけで理解するには難しいものになってしまったことには、止むを得なかった面もあると考える。

記事内容の難しさについてより気がかりなのは、少なからぬ同業者の方から、ブログへの好評をいただいたことである。初対面の方からの言葉もあったことを考えると、お世辞だけとは考えにくく、だとすると心理学者たちにとって「分かりやすい、面白い」説明が、一般の読者にとってのそれと乖離しているのかもしれない。もちろん、わざわざ声をかけて悪評をいう人はほとんど居ないので、サンプリングに偏りがある可能性は高い。前者であれば心理学全体の問題であり、後者であれば本プロジェクトメンバーの問題である。

いずれにせよ、学部生向けの講義、一般読者向けの文章執筆などにおいて、表現をより磨く必要性があることを実感させられた。

最後になるが、本ブログではすべての記事について、山本真也さん（ONDO creative）に素敵なイラストを描いていただいた。毎回、記事の原稿を読んだ上で楽しいイラストを用意してくださった氏に感謝したい。また折りにふれ記事へのコメントをくださった方々、その他の読者の方々にも感謝する。

ブログの記事については今後、iBooksやEPUBなどの電子書籍フォーマットの形で配布していきたいと考えている。